

# 郷土資料の 散歩道

図書館郷土資料室

〒21-6111 内線6201

## 手鑑 「鳥のあと」

あまかすけ  
甘糟家伝来の手鑑

今月は甘糟家寄贈文書の中から、「鳥のあと」と題する手鑑を紹介いたします。手鑑とは、古人の優れた筆跡の断簡(きれぎれになった書きもの)を集めて折帖に貼ったもので、古筆・名筆を鑑賞するため作られました。

「鳥の跡」を『広辞苑』で引くと「筆跡・手紙」とあり、まさに手鑑にふさわしい題名といえます。帖表に四七枚、帖裏に二七枚の短冊や断簡が貼られています(一部、剥れたものもある)。

甘糟家は侍組(上級家臣団)の家柄で、上杉景勝の家臣甘糟景継は酒田城主や白石城主を務めた勇将で、幕末期の甘糟継成は『鷹山公偉蹟録』をまとめた人物です。平成十四年に子孫の方から寄贈された一六六二点に及ぶ膨大な古文書類の中には、この手鑑の他にも、景勝や直江兼続の書状など、貴重な資料が多く含まれています。

## 弁慶から米沢の名筆家まで

最初の丁には後宇多院(鎌倉中期の天皇)と武蔵坊弁慶の古筆切が貼られ、細川幽斎・本阿弥光悦等の著名な人物の古筆が続きます。

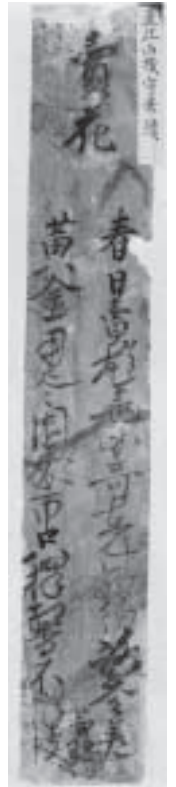
その真贋については今後の研究が必要ですが、中には鑑定家の極印が押されたものもあり、京都等で手に入れたものと思われるものです。

また、最も多いのが米沢藩士の筆跡です。米沢で「三筆」と



▲黄色の台紙に貼られている細川幽斎・本阿弥光悦・北条氏康の断簡

▶直江兼続漢詩短冊(左のように書かれてある)



春日賣花色亦奇 東阡西陌路參差

賣花

黄金用尽園成市 只擇紅香不擇枝

兼続

称された宇津江朝清・来次出雲・土佐林心的齋の書や、種村半左衛門といった江戸中期の能書家の書が並び、名家の筆跡鑑定の参考資料としても貴重です。

また、遊行上人(時宗の僧)の和歌短冊もあります。寛文九年(一六六九)

に上人が米沢に来訪した際、甘糟家と交流を深めますが、その時に贈られた短冊と思われる、甘糟家が代々集めてきた手鑑であったことを物語っています。

## 新発見

直江兼続の

漢詩短冊

米沢藩士のもので、直江兼続の

漢詩短冊が注目されます。「賣(売)花」と題する七言絶句で、これまで紹介されたことのない、新発見の漢詩です。少し傷みがありますが、直江独特の筆跡で認められています。

読み下し文は次のとおりです。

春日花を売る 色も亦奇なり  
東阡西陌 路参差たり  
黄金用い尽くして 園市を成す  
只紅香を択び 枝を択ばず

ある春の日に、東や西に道が入り組む賑わいのある花市で、色や香のよい花が売買されている情景を詠んだものでしょうか。

兼続は文武兼備の武将として有名で、特に漢詩文に才をみせ、亀岡文殊に納めた「亀岡百首」の中の七首をはじめ多くの漢詩を残しています。この新発見によって、兼続が詠んだ漢詩がまた一つ増えたことになります。